

10. *Actinobacillus pleuropneumoniae* 7型による豚胸膜肺炎

豊後大野家畜保健衛生所、大分家畜保健衛生所¹⁾

○山本史子、里秀樹、芦刈美穂、廣瀬英明

病鑑 滝澤亮¹⁾、病鑑 坂田真友子¹⁾、病鑑 山田美那子¹⁾

【はじめに】

豚の胸膜肺炎の原因となる *Actinobacillus pleuropneumoniae* (以下 App) は従来、血清型 1、2、5 型が広く浸潤していたが、近年血清型の多様化が進んでいる。今回、App7 型による豚胸膜肺炎を県内で初確認したので、その概要を報告する。

【経過と発生状況】

2010 年 7 月、管内の養豚農家（母豚 250 頭規模）から、150～180 日齢の肥育豚の死亡が増加したとの連絡を受け、立入りを行った。死亡例は一豚舎に限局し、発咳、沈うつ等の症状を示す豚が多数確認された。農場では母豚に PCV2、AR のワクチン、子豚に *Mycoplasma hyopneumoniae* のワクチンを投与。抗生剤は ST 合剤およびタイロシン製剤を肥育豚 65 日齢から 10 日間飼料添加していた。

【材料と方法】

① 150 日齢の死亡豚 1 頭を用い病性鑑定を実施した。②ウイルス学的検査：扁桃、肺を用いて豚サコウイルス 2 型 (PCV2) および PRRSV の特異遺伝子の検出を実施した。③細菌学的検査：主要臓器および脳を定法により分離培養した。App 分離菌は共凝集反応により血清型を分類し、薬剤感受性試験を実施した。④病理学的検査：主要臓器および脳を定法により HE 染色した。肺は抗 App7 型家兎血清を用いた SAB 法による免疫組織化学染色 (IHC) を実施した。⑤ App 浸潤状況調査：同居豚および環境から App を分離培養した。

【結果】

①剖検所見：肺胸膜の線維素付着、胸膜の癒着、肺の充出血、水腫、暗色肝変化、胸腔リンパ節の充出血が観察された。②ウイルス学的検査：扁桃から PCV2 特異遺伝子が検出された。PRRSV 遺伝子は検出されなかった。③細菌学的検査：肺から App7 型を分離した。薬剤感受性試験の結果は、エンロフロキサシ、オルビフロキサシ、ヒコサマイシンは感受性、アモキシシリン、アンピシリン、エリスロマイシン、チアンフェニコール、フロルフェニコールは中間感受性、ST 合剤、タイロシンは耐性であった。④病理学的検査：気管支に好中球および細胞類廃物が充満し、肺胞腔内に漿液の貯留と線維素の析出、好中球の浸潤が観察された。気管リンパ節の辺縁洞に重度の好中球の浸潤を認め、肺の小葉間結合組織に水腫性拡張と軽度の好中球浸潤が認められた。肺の IHC の結果、異物巨細胞の細胞質、肺胞腔内に App7 型の特異抗原が得られた。⑤ App 浸潤状況の調査：全ての検体から、App は分離されなかった。

【まとめ・考察】

病性鑑定結果より、App7 型による豚胸膜肺炎と決定した。App7 型による胸膜肺炎は、県内初確認であった。フロルフェニコール製剤の飼料添加、飲水投与により、肥育豚の月間事故率は発生した 7 月の 9.4% から 8 月は 4.3% へと減少した。